

# 国際平和

vol.17-3 2010.3.10

# ミュージアム

# だより



## CONTENTS

- 2・ **スポット** ミュージアムの收藏品 46  
電車優待乗車券
- 3・ **巻頭つれづれ**  
中野信夫さん、百歳にして逝く  
立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長  
安齋 育郎  
〔立命館大学国際関係学部教授〕
- 5・ **館長だより**  
地球市民教育・平和教育と学校教育  
立命館大学国際平和ミュージアム館長  
高杉 巴彦
- 7・ **ミニ企画展** 開催報告 (2009年10月~2010年1月)
- 8・ **ここが見どころ** 戦争展示の難しさ (1) - 「表現しようのないもの」に向き合って-  
立命館大学国際平和ミュージアム副館長 小関 素明  
〔立命館大学文学部教授〕
- 9・ **運営委員リレー連載** IT技術と平和  
立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 大島 登志一  
〔立命館大学映像学部教授〕
- 11・ **おすすめの一冊** 藤田みどり著『アフリカ「発見」：日本におけるアフリカ像の変遷』  
(岩波書店 2005年5月) 立命館大学国際平和ミュージアム運営委員 須藤 直人  
〔立命館大学文学部准教授〕
- 12・ **事業報告** 2009年度秋季特別展 フィリピン・カオハガンのキルト展
- 14・ **事業報告** 世界報道写真展2009-大分・滋賀・京都会場-
- 16・ **事業報告** 映画上映会『台湾人生』 & 『ONE SHOT ONE KILL-兵士になるということ』フィルム公開
- 18・ **事業報告** 2009年長崎青少年ピースボランティアとの平和交流事業
- 19・ 平和へのメッセージ-常設展示見学者の感想-
- 20・ 2008年度 資料・図書など寄贈者一覧
- 22・ 2009年入館者状況 (2009年4月~12月)、編集後記
- 23・ ミュージアムインフォメーション



立命館大学  
国際平和ミュージアム

Kyoto Museum for World Peace,  
Ritsumeikan University

# 電車優待乗車券



電車優待乗車券

縦5.7cm／横8.3cm 年代：1941年 寄贈者：池垣喜資子



参考資料：靖国神社臨時大祭参拝遺族優待券の袋

この資料は、1941(昭和16)年10月に靖国神社合祀者遺族向けに発行された乗車券です。発行した東京市電気局は、1911(明治44)年に東京市が東京鉄道株式会社を買収して路面電車事業と電気供給事業を開始したもので、当時、靖国神社の最寄りの停留所は九段下でした。

乗車券の中央には、靖国神社正面の風景と桜の花がデザインされています。また、右下には東京市の紋章、左下には電気局の紋章が入っています。乗車券の有効期間は、昭和16年10月13日から24日までです。

また、裏の注意書きには「通用期限が経過後は記念としてお持ち帰りください」との文言もあり、靖国神社合祀遺族の記念品としての性格もあったことがわかります。

1869(明治2)年に建設された「東京招魂社」は、1879(明治12)年に「靖国神社」と改名され、一五年戦争当時、日本の戦争や事変における「殉死者」を祭神として祀り、戦死を美化する装置として重要な役割を担っていました。

1941(昭和16)年10月の臨時大祭の遺族行動一覧表によれば、期間中の遺族の主な行事予定は、以下のとおりです。

- 13、14日：遺族の受付
- 15日午前：「事変関係展覧会観覧」
- 午後：「陸海軍大臣および大祭委員長の遺族に對する挨拶」
- 「招魂式」(戦死者の霊を本殿に遷す儀式。夜にかけて行われた)
- 16日：「御府拝観」
- 17日：「慰安会」(東京宝塚劇場で観劇)
- 18日：「行幸行啓奉拝」(天皇・皇后が参拝)
- 19日：「昇殿参拝」
- 20日：「慰安会」(東京宝塚劇場で観劇)
- 21日：「新宿御苑拝観」

『写真週報』192号(昭和16年10月29日付)によれば、この臨時大祭では15013柱が合祀され、遺族約3万人が天皇の参拝をむかえました。

また、慰安会は班ごとに日程が割り当てられ、期間中にいずれかを鑑賞できるよう計画されていました。明治座や新橋演舞場に割り振られた班もありました。さらに、靖国神社臨時大祭に出席する遺族に配布された「参拝遺族優待券」には遊就館参観券、国防館参観券、海軍館参観券、上野動物園参観証、帝室博物館参観証、聖徳記念絵画館拝観証などが含まれ、これら施設を随意参観するように呼びかけています。遺族は、居住地と東京の往復の列車や東京での宿泊先の手配も受けており、乗車券は、こうした催しに参加する際の東京市内での移動のためのものでした。

ところで、この頃は戦死から合祀まで2、3年の期間がありました。例えば、この乗車券は1938(昭和13)年12月に中国で戦死した陸軍少尉が1941(昭和16)年10月に合祀される際、遺族に発行されたものです。当時は、テレビやインターネットもなく、汽車に乗って東京を訪れることは物理的にも金銭的にも今よりはるかに困難な時代でした。東京を訪れて博物館や劇場といった当時の先端の施設を見て回ることは、遺族にとって極めて刺激的な体験です。家族を失った悲しみが癒えるのに必要な時間は人それぞれです。しかしある程度は生活に落ち着きを取り戻す時期に長い旅をし、壮大な宗教儀式に立ち会い、先端の文化施設をまわることで、戦死は名誉であり、国家は偉大であると確認させる巧妙な演出です。臨時列車の運行や食事の手配、民間を含めた宿泊施設の確保、婦人団体などによる遺族の接待や案内、地方自治体を通じた連絡と調整など、多くの組織や機関を巻き込んで、侵略戦争を正当化する大イベントを繰り広げていたわけです。

ところで、この乗車券の通用期間は、近衛文麿内閣から東条英機内閣にかわった時期であり、アメリカ・イギリスとの開戦をめぐり、日本が大きく動き出した時期でした。

(学芸員 兼清順子)

## 中野信夫さん、百歳にして逝く

立命館大学国際平和ミュージアム  
名誉館長 安斎育郎  
(立命館大学国際関係学部教授)

### ■ 「古希」から「近多」へ

私は1940（昭和15、皇紀2600）年4月16日生まれだから、2010年の今年、おひつじ座の星々が太陽の向こう側に宿るころ、満70歳になります。昔は「古稀」と書かれてましたが、常用漢字の関係で今は「古希」と書きます。かの唐の詩人・杜甫の「曲江」と題する詩がこの言葉の出所で、「酒債尋常行處有 人生七十古來稀」（酒代のつけなら私が行く所にはごく普通にあるが、人生七十歳まで生きる人は稀にしかいない）ということのようです。この場合の七十は「数えの70歳」のことなので、何か祝いの真似事でもやるなら去年だったらしいのですが、そんなことは話題にもならず、69歳は過ぎ去ろうとしています。

理由には2つあります。

一つは、70歳という年齢が稀ではなくなったことです。私の恩師筋に当たる先生に、地球化学の発展に貢献した三宅泰雄さん（1908～1990）がいます。古希のお祝いを東京神田の学士会館でやったとき、三宅さんは、「“人生七十古來稀なり”というが、今では“人生七十近來多々あり”なので、“古希”ではなく“近多”と呼んだ方が適切なのではないか」と挨拶しました。確かに、70歳の方は身のまわりに数多く見られますし、昔から「五十、六十湊垂れ小僧、七十、八十まだまだ若い、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」という言葉も伝えられています。70歳になるからといって特別に祝おうなどという時代ではないのでしょうか。

二つ目の理由は、私が昨年年度途中で「腰痛」を患ったことです。2009年6月28日、午前中はある出版社の編集会議に出席し、午後は元気に神戸での医療関係者に対する講演活動をすませ、電車を乗り継いでちゃんと家まで帰ってきたのに、その3時間後には身動きがとれなくなりました。その夜は文字通り一睡もできませんでしたが、横になったら起き上がるのが至難の業、「七転八倒」というけれど、寝返りを打つことさえできなくなってしまったのです。広い意味で「ぎっくり腰」なのでしょうが、翌日病院でもらった痛み止めでも当面の激痛は治まるかには見えなかったものの、夏の期間の無理がたたって秋口に再び動きにくくなり、難渋

しました。ところが、MRIやレントゲン撮影や血液検査では重大な異常は何一つ検出されず、「年齢相応の足腰の弱体化が原因」ということのように、以来、ひたすら「一日一万歩」歩け歩け運動に取り組みました。その後の100日でおそらく500km以上は歩いたでしょう。優に東京一大阪間の距離にも匹敵します。体重が1年前に比べて10キロ減、中性脂肪も半減、悪玉コレステロールも減少傾向をたどるなど、思いがけない副次的効果が実感できましたし、肝心の腰痛も徐々に快方に向かいつつあり、「うん、一病息災だ」と妙に感じ入っています。腰痛と闘っているらしい私に「古希の祝い」などという話は誰ももちかけないでしょうね。

それにしても、腰痛対策ではじめた歩け歩け運動は、身のまわりを取り巻く自然や人間模様を改めて目を向ける貴重な機会を与えてくれました。散策の道筋にどんな草木が生えているか、その枝ぶり、葉のつき方、根の張り方一つ一つが新鮮でした。冬の夜空には、オリオン座の3つ星の方向に「大三角形」や「大六角形」が輝いているのを鑑賞するのも喜びでした。街並みをきょろきょろと歩くのは「泥棒の下見」のようで気もひけますが、住宅見学ツアーのようでもあり、楽しくもありました。雨水、汚水、止水弁、消火栓、防火用水、空気弁など様々な目的のマンホールの数や配置や施工順序、「・・・1」とか「7777」とか「1188」とかいった家々の車のナンバー・プレートにこめられた思いなど、観察はイメージーションの源泉となり、散策を単なる腰痛対策以上の思索のための契機に変えてくれたのです。

### ■ 中野信夫先生、100歳にして逝く

立命館大学国際平和ミュージアムは、「平和と民主主義」を教学理念とする立命館大学の努力はもちろんですが、加えて、1981年から毎年開催されてきた「平和のための京都の戦争展」の成功に努力してきた市民たちの協力があって初めて実現したものです。平和のための社会的責務に対する立命館大学の自覚と、年1回の戦争展の蓄積の上に常設展示館を切望していた市民たちの思いの交差点—それが国際平和ミュージアムとして1992年に結実したとっていいでしょう。そ

して、「平和のための京都の戦争展」運動の大切なリーダーの一人が、眼科医の中野信夫先生でした。中野先生は、戦前は無産者診療運動にも関わっておられましたが、自らもビルマでの従軍体験をもっています。戦後は、日本の眼科医療の発展と普及に努めながら、保険医運動や平和運動の発展のために献身され、立命館大学国際平和ミュージアムの創設に当たっては多額の寄付をされました。

その中野信夫先生が、2010年1月16日午後5時50分、数え歳100歳で他界されました。「七十、八十はまだ若い、九十になって迎えが来たら、百まで待てと追い返せ」という言葉を引用しましたが、中野先生は「百まで生きよう会」の代表でもありました。まさに代表自身はその目標を達成しての静かなご逝去でした。

中野先生はご自宅のそばの畑でよく野良仕事をされていました。時おり先生のご自宅に平和ミュージアムの近況報告などで伺いましたが、ある時外国からの客人を京都の寺など案内して、予告もなく先生のお宅のそばを通りかかると、農作業姿の先生が何やら手に持って働いています。声をかけると挨拶も早々に、「この柿、持って行きなはれ」と言われて、枝についたままの柿をたくさん頂いたりしました。家に持って帰るのに苦労しましたが、気さくで、自由な人でしたね。

中野先生は趣味の一環として絵も長く続けられ、1994年9月20日～25日には国際平和ミュージアムで「平和と長寿をねがう中野信夫絵画展」を開いたこともありましたし、先生の絵画展は中国でも開催されました。ビルマ従軍記のスケッチは、戦地での体験を記録した貴重な資料でもあります。蛍が灌木に群がって光を発している前を横切ったりすると、すぐに見つけて攻撃目標にされるお話など、臨場感をもって伺った記憶が蘇ってきます。

中野先生は、市民運動の発展にはことのほか心を砕かれ、運動の発展の妨げになりかねないような状況の時には、言うべきことをきちんと主張しました。それ

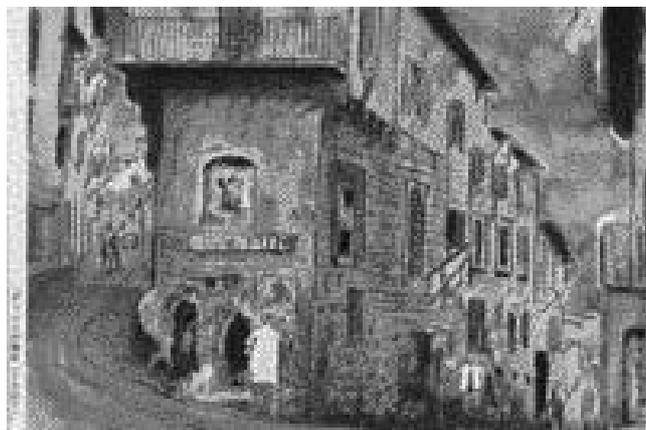
は叱りつけるような冷い言い方ではなく、「今後はあんじょう頼んませ」という感じの、厳しさや真剣さを温もりで包み込んだ柔らかい示唆だったように思います。

中野先生の平和ミュージアム発展へのご貢献を深く感謝し、謹んで哀悼の意を表したいと思います。

## ■ 齢七十をどう過ごそうか

私の誕生日は4月16日、映画王チャールズ・チャップリン（1889年4月16日生まれ）や満州国最後の皇帝・愛新覚羅溥儀の弟・愛新覚羅溥傑（あいしんかくら・ふけつ、1907年4月16日生まれ）と同じです。チャップリンは4日後の1889年4月20日に生まれたナチス総統アドルフ・ヒトラーとは生涯の宿敵で、私の授業でもヒトラーを徹底的に茶化した名画『独裁者』を紹介したりします。別にそれ以上ではないのですが、誕生日が同じというだけで、何となく親しみがあります。愛新覚羅溥傑さんには、1992年5月19日に国際平和ミュージアムの開設記念企画でお会いしました。そのとき墨痕鮮やかに書いて頂いた書は、今も当ミュージアムに展示してあります。溥傑さんともそれ以上の関係はありませんが、平和ミュージアムの館長に就任するに当たっての開催記念企画で、同じ誕生日の溥傑さんとお会したことも何となくご縁を感じたのです。

とにかく、私は今年の4月16日で満70歳、来年3月末で任期満了になります。新年度には、ミュージアムの将来計画や後継体制についてしっかりと考え、実行しなければなりません。杜甫は「酒債尋常行處有」と吟じ、未払いの酒代を気にしていたようですが、私にとっては「課題尋常行處有」という気分で、当ミュージアムはもとより、国内外の平和博物館運動の発展のためにどのようなレールを敷くべきか、気にかけて続けたいと思っています。幸い、杜甫の時代とちがって「人生七十近年多」、まだまだ老け込む年齢ではないのですから。



1994年「平和と長寿をねがう中野信夫絵画展」より



戦没画学生慰霊美術館「無言館」（長野県）での、中野信夫さんご夫妻と筆者

## 地球市民教育・平和教育と学校教育

立命館大学国際平和ミュージアム

館長 高杉巴彦

### ■ 教員免許状更新講習を実施して

2009年の教員免許更新制度によって、教員の10年ごと30時間の講習と認定試験が義務化され、免許失効もありうることになり、全国の大学に講習の提供が要請され、立命館大学もこの講習講座を実施しました。この更新制の是非をめぐるでは当然議論があり、政権交代で廃止の方向も出ていますが、受講者からの評価のまとめが1月に発表されました。全国的に好評で、4段階評価で「よい」「だいたいよい」が必修科目・選択科目とも90%以上となりました。立命館大学でも選択科目の中に、世界唯一の大学立の国際平和ミュージアムを持つ特徴を活かして「平和教育」講座を設定し、平和教育の意義やあり方を、具体的事例研究も踏まえて展開し、「平和教育」のための力量養成に資する講習を行いました。アンケート結果からみても非常に好評であり、特に、受講者は社会科以外の担当教科や小学校の教員が多数となり、その期待の大きさが示されました。これらを通じて、資格認定や排除の目的での講習には賛同が得られないが、日ごろ実践の中で必要性を感じている課題については、教員の皆さんが大いに研修意欲を持って望んでいることがひしひしと感じられました。

### ■ 平和教育とは

平和教育はその目標を平和な世界創造の主体形成におき、平和を志向する観点や態度・技能の育成をはかって来ました。そのためには当然平和問題に関する知識の習得や、集団間の争いを非暴力的に解決する方法の習得、さらには文学・芸術・情操面からも自己と他者とを認識していく営みなどに取り組んできたわけです。

戦後日本の平和教育では、戦争の痛苦の体験から、「一五年戦争」と日本国憲法の学習を中心に、また特に「原爆」や「沖縄」学習が、教科教育や課外学習、修学旅行などを通じて多彩に実践されてきました。その中で「戦争はいけない」「平和が大切」という考え

方は日本の中に広くいきわたり、日米の学生交流などの中でも、そうした日本の学生の考えは、アメリカの学生たちの「平和のためには闘う。」という考えとの違いとして際立っています。

一方で、戦争の悲惨さをリアルに伝えていく体験者は高齢化で少数になっていき、過去の戦争の記憶をどう集团的・社会的記憶として伝えていくのかの取り組みが生まれています。しかしこうした努力がありながら、現在の戦争や紛争について自分たちとの関連につながる認識は持ちえていない場合が多く、そのことは「戦争の悲惨さ」を中心とした教育においても、何回か繰り返されるうちに、受け取る側は「またか」「重たい」というふうに感じてしまうことが起こっています。そして他国からの日本批判や場合によって一面的とも見られるナショナリズムなどに、容易に反発を増幅するという傾向にもなっています。

この点では、「戦争」の悲惨さを認識し人間の尊厳を大切にする意識の涵養とともに、歴史認識をしっかりと深めることで、「平和が損なわれた」ことの原因や本質に構造的・分析的に迫る力を養成することが「平和教育」の大きな柱として重要です。

同時に、今日世界で起こっている戦争や紛争と日本および自分とがどうつながっているのかを実感し、自分の生き方や行動、人間関係や社会的関係をどうとっていくのかの指針を現実世界の中で構築していくことが求められているのです。

### ■ 「包括的平和教育」

平和学者ヨハン・ガルトゥング氏は「平和」の定義の中で、「戦争」を「直接的暴力」とし、暴力を加えるものが特定されない政治的・経済的抑圧や差別などを「構造的暴力」としました。例えば飢餓・貧困・人権抑圧や社会的不平等、環境破壊、教育や医療の遅れ、などが要因で、本来人間の持っている能力を全面的に開花できず、「平和」を脅かす「暴力」が生み出されているような場合に、これらを「構造的暴力」と呼ぶ

だのです。そしてこうした「構造的暴力」のない社会をめざすことを「積極的平和」の実現と位置づけました。そしてベティ・リアドン氏らはこの「積極的平和」実現への教育を「包括的平和教育」と呼び、平和にかかわる人類的課題を克服する世界的試みを理解し「平和な社会」を創り出していく普遍的・文化的平和教育を提起し、発達段階に応じた平和教育のプログラムの試みも進めてきたのです。

一方で、「包括的平和教育」に関連・隣接する教育としては、人権教育・開発教育・紛争解決教育・軍縮教育、さらには国際理解教育・多文化教育・異文化間教育・グローバル教育・地球市民教育・意思決定教育・新聞活用のNIE教育・国際ボランティア（NPO）連携教育・環境教育、国際交流、芸術的行事や研修（修学）旅行など、多様に進んできました。

こうしたとき、既成の「平和教育」の枠組みには、はまらない諸分野の教育をどう関連させ位置づけ直すか、また学校教育のなかにどう位置づけるのか、さらには学校教育と社会教育との再編成まで含めた検討が必要とされる時代となってきました。

## 地球市民教育

「戦争と平和」を扱う狭義の「平和教育」から、地球や世界に関わる人類的課題を克服して「持続可能な平和な社会」を創り出していくために、「和解と共生」の道筋に沿って創造的に行動する人材を育成する教育は、いわば「人類のあり方」をしっかりと見据える教育であり、狭義の「平和教育」や環境教育・開発教育・国際理解教育などの根底・基盤たる教育といえるのではないのでしょうか。

それは地球成立と生命の発生以来の地球史がどう発展していくのか、その中で人類がどうあるべきなのかを見定めていく大きな視点と価値認識を共有することにつながるわけで、それは「地球市民教育」とでも名づける必要があるものでしょう。

地球史の中で人類は「思惟する最高の存在」として出現し、かつ地球史と宇宙史を認識する「唯一（当面、認識の限りにおいて）」の存在と仮定するならば、この人類がその地球の発展・展開に寄与することの意味は大きいと思わないわけにはいきません。もちろんこれは「おこがましい」と言われかねないし、もし人類が亡ぶことが地球史全体の発展である場合も、考慮の

対象として理論的には許容の範囲でしょうが、ともかく人類と地球上の生命と地球全体の力量を全面的に発揮させ、その持続的発展を保障するために、人類は何をなさなければならないのかを考え・行動することの「教育」、つまり「新しい平和」の考えを据えて、それを「地球市民教育」として展開することが実践段階にきているでしょう。

その「地球市民教育」分野に、「平和教育」をはじめ、人権教育・開発教育・環境教育・国際理解教育・多文化教育などがあり、また生活指導教育や倫理・道徳教育さらにはキャリア認識教育なども連携した視野の中に置き直すことが出来ないのでしょうか。

## 地球市民教育と学校教育

若者に対する教育は、この「地球市民教育」の視点を置きながら、人類社会の到達点をしっかりと学び、次世代の人類として生活し社会に関わっていく力を獲得することなのでしょう。その点から自然科学や人文・社会系の諸学問の到達点を学ぶ教科に根ざした教育と、芸術性と感性の豊かさを深めていく教育の営みと、その基盤としての「地球市民教育」いわば「グローバル・シチズン・アーツ」を身につけていく取り組みを組み合わせ合わせたカリキュラム構成を学校教育が創りあげて、世界と日本の違いや日本文化の特徴を理解して自分の主張が出来る人材の育成が問われているでしょう。

同時に国際平和ミュージアムという社会教育の分野からすると、歴史・公民教育との連携だけではなく、この「地球市民教育」分野でのカリキュラムの成立が、授業と社会教育との連携を恒常的なものにする重要な要素だと思えます。今までの学校教育では、どうしても「平和教育」における具体的実践課題は、小学校6年や中学校2年の歴史分野、中3公民分野での学習や、総合学習での取り組み、高校の歴史分野や修学旅行等を利用した平和学習などに集中され、それも沖縄や広島・長崎という枠組みなどが強く、「京都に行くのになぜ平和学習か？」という疑問が出たりする状況も中には見られました。またせつかくの「総合学習」も狭い「学力論」に押されて狭まる傾向にあり、今「平和学習」をヒドゥン・カリキュラムにとどめることなく、「地球市民教育」分野として確立することの検討が期待されますし、平和ミュージアムもそれを創りあげていく役割を果たしたいと思っています。

## 開催報告

(2009年10月～2010年1月)

今号では2009年10月から2010年1月の間に開催しましたミニ企画展示をご紹介します。

### 第51回 立命館附属校第3回平和教育実践展示

会期 2009年10月11日(日)～12月18日(金)

2007年度から開催している附属校実践展示は、今年度で3回目を迎えました。立命館附属校の初等・中等教育段階での平和・人権教育の実践内容を紹介することを通じて、今日の小学生、中学生や高校生の平和・人権課題に対する意識、現代社会や世界との関わり方に対する認識を、展示物を通じて知ってもらおうとするもので、各校の生徒の取り組みとその実績を成果物として展示したものです。



平和教育実践展示の様子  
(立命館小学校展示)

各校の展示日程と内容は下記の通りです。

[日程と展示内容]

#### ①立命館中学校・高等学校

会期：10月11日(日)～10月23日(金)

テーマ：「立命館中高における平和教育実践」

内容：中学3年生、高校1・2年生が取り組んだ平和に関する夏休みの課題をまとめた展示と、創立90周年当時の生徒会における取り組みを紹介。

#### ②立命館守山中学校・高等学校

会期：10月25日(日)～11月6日(金)

テーマ：「戦争の真実と現在の世界」

内容：中学2年生が広島での平和研修に取り組むなかで、その事前・事後学習の成果をポスターで表現し展示。テーマは「毒ガス」「沖縄戦」「広島原爆」。

#### ③立命館宇治中学校・高等学校

会期：11月8日(日)～11月20日(金)

テーマ：「過去に目を向け未来を考え拓く」

内容：高校3年生による反貧困ポスター展示と、中学生による平和ミュージアム見学レポート、戦争体験の聞き取りレポートをまとめた展示。

#### ④立命館小学校

会期：11月22日(日)～12月4日(金)

テーマ：「立命館小学校平和教育の取り組み」

内容：「スリランカプロジェクト」にて地震と津波によって被災した小学生との交流の発

表。沖縄・広島での調査報告を壁新聞として展示。また平和のポスター展示も行った。

#### ⑤立命館慶祥中学校・高等学校

会期：12月6日(日)～12月18日(金)

テーマ：「平和の世界観」

内容：中学3年生と海外留学生が「平和教育ディスカッション」を実施し、平和への実現に向けて意見交換した様子の展示とその記録ビデオの上映。校内にて開催された「原爆と人間展」の生徒たちの感想もつづる。

### 第52回 ベトナム経済発展と ストリートチルドレン～開発の再考～

会期 2010年1月9日(土)～1月31日(日)

現在、ベトナムは著しい経済発展を遂げ、世界の注目を浴びていますが、その成長の裏側で多くの問題も生じています。市場経済は、ベトナム国内に富裕な層を生み出しましたが、その一方で経済格差が拡大し、ベトナム戦争や枯葉剤被害者などの問題は陰に隠れがちとなっています。本企画は、2007年度から本学の政策科学部自主ゼミ「ベトナム社会研究会」の学生8名が、ベトナムの社会や経済について調査・研究してきた活動の成果の発信です。経済発展の結果生じた貧困やストリートチルドレンの問題に焦点を当て、学生たちが現地でもレポートした写真を展示し、本当の豊かさとは何かについて考えるきっかけとなりました。



「ベトナム経済発展とストリートチルドレン～開発の再考～」展示の様子

\*\*\*\*\*

### 【特別展示】

#### 「平和のポートレート」展

会期 2009年12月18日(金)～2010年1月31日(日)

12月18日(金)よりミュージアム2階ロビーにて、カイヤ・クラーク (Kyla Clark) 「平和のポートレート」展を開催しました。ロングアイランド大学(米国)・グローバル・カレッジ在学中のカイヤ・クラークさんは2007年から「平和プロジェクト」に取り組み、世界で出会った人々のオーラル・ヒストリーを聞き取り、彼らのポートレートを描いて、それを歴史的な文脈の中に位置づけるという作業を行っています。コスタリカでニカラグア人移民として差別と貧困の中で暮らすふたりの女性、文化大革命の残虐行為の犠牲者である「ミス・上海」、広島で被爆し、世界の核拡散を食い止め世界平和を広げるために自身の被爆体験を語り部・永原誠氏。今展では4人のポートレートを展示しました。

## 戦争展示の難しさ (1)

### — 「表現しようのないもの」 に向き合って —

立命館大学国際平和ミュージアム

副館長 小関 素明

(立命館大学文学部教授)

博物館の常設展示を企画・準備することには多くの苦勞が伴います。特に、当館のように研究・教育・学習・啓発の機会と場を提供することを趣旨とした大学立の平和博物館においては、来館者のみなさんにいかにすれば有意義な平和学習の機会を提供することができるのかということをつねに視野に入れながら、展示物の「選別」だけでなく、展示の「構成」を模索する必要があります。どのように展示を「構成」すれば「平和」の重要性を再考してもらえる有効な機会を提供できるのか。まさにスタッフの悩みと試行錯誤は尽きないわけです。

現在皆さんに見ていただいている地下の常設展示は2005年にリニューアルされたものです。私は2009年4月に当ミュージアム副館長に就任しましたので、現在の常設展示の企画・準備には加わっていません。そこで今回は、企画・準備されたスタッフの苦勞をしのびつつ、みなさんと一緒に来館者のつもりで常設展示を眺めてみたいと思います。私は大学で日本近現代史を教えています。当然戦争は最大のテーマの一つです。ただ戦争を講じるには、私が戦争を知らない戦後世代ということを別にしても、幾つかの難しさがあります。その経験も少しおし交ぜながら、順を追って常設展示をながめてみましょう。

本館の地下1階の常設展示は「テーマ1 一五年戦争」「テーマ2 現代の戦争」の2つの大テーマが設定され、通常「一五年戦争」冒頭の「1軍隊と兵士」というコーナーから閲覧を始める皆さんは、徴兵、軍隊の規律、軍隊生活、従軍の状況…と順を追って軍隊に関する知見を深めることができるように構成されています。ではなぜ軍隊の問題から展示をはじめのでしょうか。それは、明示的には掲げていませんが、「そもそも戦争はなぜはじまったのか」という根本的な設問を展示の導入として重視しているからに他ありません。戦争は言うまでもなく軍事行動であり、その直接の推進主体である軍隊の実体や活動を抜かしては、この設問には答えきれません。この点から言えば、「天皇の軍隊」としての制度的強制力を駆使して国民を誘導し、洗脳した軍隊が、国民の「協力」を強引かつ巧妙に引き出しながら、不条理な戦争を引き起こしていったことを

的確に理解することはきわめて重要です。まさに不条理な戦争は、不条理な「天皇の軍隊」とともにあったのです。

しかし実はここからが難問なのです。ではなぜ軍隊はそうした軍事行動を画策したのでしょうか。それをクリアーに説明するのは授業でも悩むところであり、多くの近代史研究者が頭を悩ませるところでもあります。授業ではその要因として、さしあたって柳条湖事変の立役者である石原莞爾いしはらかんじらによって満蒙領有計画が画策されていたことなどを説明します。展示でも音声資料などを活用すれば、これに触れることまでは可能でしょう。

それではなぜ満蒙領有が画策されなければならなかったのでしょうか。これを単純に一部の軍人の暴挙ないし陰謀の所産として説明してしまったのではあまり意味はありません。ここまで問いを掘り下げたとき、日本が満州や朝鮮を植民地とした経緯や、それ以降の列国の外交政策など、時間的にも空間的にも総合的な説明、最終的には日本近代史すべてにわたりかねない説明が必要となります。当然、そのすべてを展示資料で再現することは言うに及ばず、少し長い説明を併用してもそれを十分に達成することは不可能です。これは授業での説明においても苦慮するところです。

それともう一つ注意すべきは、戦争の原因を単なる「支配者の暴挙」という説明で片づけずに、当該時期の環境条件（国際環境など）を視野に入れて説き明かそうとすると、ともすれば戦争が「それなりの意味」をもっていったかのような「説明」に流れ、その結果「つまり戦争は避けられなかったということか」といった類の「理解（誤解?）」を触発しかねないことが間々あるということなのです。悩ましいジレンマです。

この二点は、戦争を根本的に解き明かそうとすればするほど直面する難点であり、陥りがちな陥穽です。展示は授業と異なって言葉を多用して論ずる、説明するということに限界があるため、この難点や陥穽からより逃れにくいと言えるかも知れません。

企画・準備したスタッフの苦勞をしのびながらこうした点に思いをはせれば、これまで意識しなかった戦争展示の「見どころ」が見えてくることでしょう。

## IT技術と平和

立命館大学国際平和ミュージアム  
運営委員 大島 登志一  
(立命館大学映像学部教授)



写真1 ウルグアイの子どもたちとOLPC

### はじめに

私の専門分野は、「人工現実感」あるいは「バーチャルリアリティ」と呼ばれる技術領域で、コンピュータグラフィックスなどによって人工の環境を作り出し、様々な状況を映像だけではなく五感を通して疑似的に体験したり、コンピュータをより直観的に操作するためのインタフェースを実現する技術です。本文章では、そのような背景から、より広くコンピュータを基盤とした「IT技術」と「平和」との関係について、考えてみたいと思います。

### インターネットで「平和」を検索

今回、リレー連載の機会をいただきましたが、率直なところ、「平和」というキーワードに関して、日頃、考えを巡らせるということをしておりませんでしたので、このような形で文章を書くことには、大変恐縮しています。付け焼刃なのは承知の上、何某か考えるきっかけを得なくてはと、良くない習慣かとは思いますが、まずはインターネットでフリー百科事典「ウィキペディア」を検索してみました。眉をしかめる向きもあろうかと思いますが、ひとまず、ご容赦下さい。

「平和（へいわ）とは、狭義では戦争のない状態で、暴力的な政治的活動が行使されない状態を言う。」

戦争がなければ平和であるという説明です。さらに、

以下のように続きます。

「広義には、人間が相互の恒常的な自由と秩序・安寧・平安などを実現・維持している状態で、これを脅かす全ての暴力がない状態を言う。」

「また、明確な危険が存在しない状態であっても、差別・貧困・飢餓・疾病・教育格差・情報格差などが存在している場合は、やはり人間の自由が脅かされていることに変わりはない。このような行為主体が明確でない暴力を構造的暴力ととらえ、これらの無い状態を平和とすることもある。」

後者、広義の説明では、非軍事的な社会問題まで対象を広げて、個人が生活のなかで実感する平和を取り扱っています。

### インターネットから書店へ

さて、上記、なるほどとは思いますが、このようなインターネット検索での情報は、どう解釈すべきでしょうか。公序良俗に反しない限り、誰でも寄与でき、その反面、何の文責もないフリー百科事典です。厳密な定義の難しいトピックスなども若干の齟齬などはあまり恐れず、簡潔にまとめていると思われませんが、平和研究の当該専門分野での議論を知るには、書籍にあたる必要がありそうです。検索を端緒として、特に構造的暴力論に言及した手頃な読み物が欲しくなり、とりいそぎ近所の本屋に足を運びました。

新書のコーナーで手にしたのは、最上敏樹著『いま平和とは：人権と人道をめぐる9話』（岩波新書）です。平和研究者である著者が2004年の「NHK人間講座」用に起こしたテキストを大幅に加筆改訂し、2006年に出版したもので、20世紀以降の戦争と平和に関わる9編のトピックスが分かりやすくまとめてあり、俄かに勉強を始める向きにも良書と思います。

構造的暴力論の文脈での平和に特に興味を抱いたのは、IT技術が平和に役立つシチュエーションを考えると、特に非軍事的な社会問題への貢献におけるであろうと思われたからです。以下、前記の参考文献の内容とは特に直接的な関係はないのですが、独断ながら技術と平和について考えてみることにします。

## 技術と平和

ここで、技術が与えてくれる力、について少し考えてみましょう。技術をより広く道具と捉えれば、あらゆる道具は、積極的に破壊の道具として使用することはさほど難しくはない、ということに思いあたります。映画『2001年宇宙の旅』で、人類の黎明が象徴的に描かれているように、石ころや動物の骨も意図的に使えば、獲物どころか同胞の命を奪う致命的な武器となります。さらには、改めて何か特定の兵器を引き合いに出さなくても、特に20世紀以降の武器が、技術によってどれだけの破壊力を得てきたかは背筋が寒くなるほどです。

このように、破壊のために技術を用いることは直接的な効果をもたらす一方で、平和のために技術を用いるというのは、直接的な形としては、地雷除去のような戦争の後始末など、守勢であるような印象は否めないのではないのでしょうか。しかし、平和とは戦争や構造的暴力が「存在しない」状態であるという本質上、最前線で何かを突破するというようなことではなく、間接的で地道な役どころになるでしょう。

## IT技術の二面性

ところで、破壊兵器として特化・開発されるものも、その構成要素として汎用的な技術が多数盛り込まれています。現代の特徴としては、特にコンピュータを基盤としたIT技術がその中心となっているということでしょう。しばしば、特に最先端の技術に関して、両刃の剣であるというような表現がなされますが、このようなIT技術については二面性が特に顕著に思われます。例えば、先にあげたインターネット技術を含む通信技術は、軍事用の文脈で発達してきた一面もあるにしても、技術自体には直接的な危険を及ぼす要素はありません。全く同じ装置構成にしても、その作用を左右するのは、通信に乗せられた情報の用途にすぎません。例えば、全く同じ緯度経度情報を伝えるにしても、それが攻撃対象の位置を表すのか、救い出す命の位置を表すのかによって、全く逆の働きをすることになるのです。

## 新しい技術と平和利用の可能性

写真2は、IT技術とロボティクス技術の総合的な研究開発事例として示すものですが、「ビッグ・ドッグ」(ボストン・ダイナミクス社製)と呼ばれる四足歩行ロボットです。主に軍事的な目的で開発が進められていますが、人の代りに重い荷物を背負い、車両などの進めぬ不整地を歩行することができます。もちろん、



写真2 四足不整地歩行ロボット「ビッグ・ドッグ」

戦線に弾薬を運ぶこともできる一方で、災害現場に医療支援機材を運ぶこともできます。

写真3は、バーチャルリアリティ技術を応用した戦闘訓練シミュレータです。ゴーグル状のHMD(ヘッドマウント・ディスプレイ)を装着して仮想の戦場を視認し、ハムスターよろしく、大きなメッシュ状の球体の中

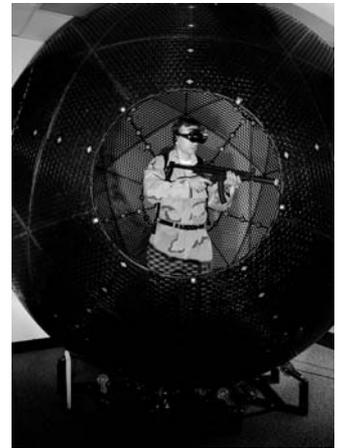


写真3 VR訓練システム「バーチャルスフィア」

で仮想空間を走り回り、戦闘訓練を行います。写真では内部を示すためにパネルが一部外されています。銃を構えているのが物騒ですが、例えば、消防士の装備をしていたとしたら、どうでしょうか。様々な災害状況を想定した訓練に活用できそうです。

前記2件は、「いかにも」新しい技術の事例でしたが、地道な平和のための技術利用として「One Laptop per Child」プロジェクト、通称「100ドルPC計画」というプロジェクトがあります。これは、ニコラス・ネグロポンテ氏(マサチューセッツ工科大学メディアラボ名誉会長)が提唱し進めているもので、開発途上国の情報格差と教育格差を解決するために、子供たちに一人一台のPCを配布しようとする計画です。特殊な技術ではないものの、コスト低減のための様々な量産技術が集約されていると言えるでしょう。

南米ウルグアイでは、36万人もの小学生が自分のPCで世界の情報に触れながら学ぶ機会を得たのです(写真1)。子どもたちは、きっと自国の平和に寄与することでしょう。

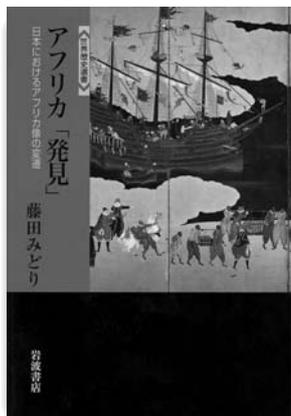
## 『アフリカ「発見」：日本におけるアフリカ像の変遷』

藤田みどり著（岩波書店 2005年5月）

立命館大学国際平和ミュージアム

運営委員 須藤直人

（立命館大学文学部准教授）



「アフリカについてのイメージは？」という問いかけには、いろいろな答えがあると思います。ニュースや文学作品が伝える、貧困、内戦、侵略、植民地といったような、それこそ「平和」とは対極のイメージばかりでもないでしょう。しかし、それでも「私たち日本人」のアフリカ・イメージはいくつかの限られたパターン

に分類しうるのではないのでしょうか。そして結局、アフリカとは「私たち」の日常世界とは全く異質の世界、究極・絶対の「他者」というイメージに収斂してしまわないのでしょうか。

ここで紹介させていただく藤田みどり氏の『アフリカ「発見」—日本におけるアフリカ像の変遷』は、日本人のアフリカ・イメージ、日本とアフリカの文化交流史を考えるうえで欠かすことのできない一冊です。私たちは、16世紀から1950年代までの、アフリカ黒人、アフリカ産の動物や、アフリカ関連の情報と日本人の「出会い」に本書を通して触れることができます。日本とアフリカとの関係を知る上で重要な、これほど様々な出来事、図像、詩、小説、映画等を扱った書は、単著としては例がないでしょう。本書はまた、副題にあるように、日本におけるアフリカ・イメージの「変遷」を跡付けることを試みており、野心的な論考といえると思います。この試みは、本書が扱った地理的な広がりや時間の長さを考慮すると、あまり例がないと思われる。同じく「発見」を論じた石川榮吉氏の『日本人のオセアニア発見』（平凡社、1992年）や、杉田英明氏の『日本人の中東発見—逆遠近法のなかの比較文化史』（東京大学出版会、1995年）にしても、本書のようにイメージの「変遷」を大きく打ち出していない。

本書は両者の出会いを複数の視点から捉えつつ、意外な事例を挙げ、読者を飽きさせることがありません。第一章「遭遇の時代—安土桃山時代」では、当時の日本人の黒人に対する態度には「のびやかさ」があったと述べ、アフリカの黒人や象に示した日本人の驚きと関心のみならず、列挙される数々の史料に出会った際の藤田氏自身の充実感をも「のびやか」な筆致で

伝えています。とりわけ日本人奴隷の話は興味深く、当時のアフリカ黒人と日本列島人とを「同じ奴隷」という観点から結びつける見方を提示してくれます。

第二章「迷走する「黒坊」像—江戸時代」、第三章「旭日と闇黒と—大日本帝国とアフリカ」においては、「のびやか」なイメージから、過渡期における情報の「錯綜」を経て、欧米流に傾いた明治期以降の「荒廃」イメージへ行き着くプロセスが説明されます。第四章「イメージの檻—大衆文化にみるアフリカ」では、アフリカ表象においてアフリカ黒人は背景へと退き、前景にはヨーロッパ人及び日本人が描かれることが主流となってゆく過程を明らかにしています。

日本とアフリカの文化交流史は、日本側から見ると、アフリカに対する無関心の度合いがひどくなってゆく歴史と映ります。本書によれば、1930年代に起きた「エチオピアブーム」にしても、エチオピア側が日本に関心を示し、エチオピア王子が日本女性を花嫁に募集する「事件」等もあって生じた外発的な「ブーム」ということになります。「連帯意識」や「共感」に支えられた、日本側からの働きかけの例はほとんど見当たらず、アフリカ黒人を背景に貶めた表象からやや抜け出そうとしたテキストとして、山川惣治「少年ケニヤ」をかりうじて見出すことができる程度です。ただ、デイヴィッド・スパーが『帝国のレトリック』で述べているように、「共感」「同情」の表現もまた、帝国主義的だといえるわけではあります。さらに、有名なエドワード・サイードのオリエンタリズム論は、知的・道徳的に劣っていると見なす「他者」（東洋、非西洋）を美的に賞賛し、愛でる（対等かそれ以上の存在として称揚する）態度をも問題としています。「イメージの檻」とは、かくもしなやかで見えにくい、厄介なものだということなのです。

所属する英米文学専攻の授業で、チヌア・アチェベ、グギ・ワ・ジオンゴら、アフリカの作家の小説や評論を扱うことがあります。ほとんどの学生は、好奇心よりは違和感が勝ってしまうようですが、本書や本書が扱うエピソードを紹介すると、それが触媒となり、アフリカの英語文学に関心が持てたという学生も出てきます。米国、ヨーロッパや、中国にばかり向いてしまいがちな眼を、本書を介して少しアフリカに向けてみて、再び自分の関心のあるところを見直したとき、何かが違って見えてくるでしょう。恵み多き本書は、おすすめの一冊です。

南の島の小さな奇跡

## フィリピン・カオハガンのキルト展

～持続可能な経済的自立のあゆみ～

会 期：2009年10月1日(木)～10月31日(土)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 中野記念ホール

参観者：11,199名

後 援：在大阪・神戸フィリピン共和国総領事館、外務省、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK京都放送局、KBS京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社、α-STATION FM KYOTO、NPO京都コミュニティ放送



会場内キルト展示の様子



一般の方々より募集したキルト作品展示の様子



会期中ミュージアムをおとずれたカオハガンの子どもたち



### 記念講演会

## 「南の島のカオハガン島における 持続可能な自立的発展のあゆみ」

日 時：2009年10月10日(土) 13:30～14:50

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階ロビー

講 師：熊切圭介(写真家・日本写真家協会副会長)

小方昌勝(立命館アジア太平洋大学名誉教授)

崎山克彦(作家、カオハガン島在住)

吉川順子(カオハガンキルト・プロデューサー、カオハガン島在住)

ジュディス・タリー

(カオハガン島出身、立命館アジア太平洋大学卒業)

コーディネーター：清水展(京都大学東南アジア研究所教授)

聴講者：107名

※講演会終了後、展示会場内にて、吉川順子氏による展示キルトの作品解説を行いました。



講演会の様子

フィリピンのセブ島沖にある周囲2kmの小さな島・カオハガンで、1996年から島民がキルトの制作を始めました。今ではキルトの販売収入が島の全収入の1/3を占めるまでに発展しています。

本展覧会では、島でキルト制作の指導にあたった吉川順子氏保存のカオハガンキルトコレクション、島の生活の様子を伝える品々、熊切圭介氏(写真家・日本写真家協会副会長)によるカオハガンの風景と暮らしの写真作品などを展示し、島の経済や教育の自立的発展の歩みをたどり、国境を越えたフェアトレードやエコツーリズムの可能性について考えるきっかけとなりました。

会期中の10月10日(土)には記念講演会を行い、第一部として、写真家の熊切圭介氏より、島との出会い、そこでの自然の素晴らしさに魅せられて写真を撮り始めたこと等をお話しいただきました。

第二部では、立命館アジア太平洋大学名誉教授の小方昌勝氏、作家でカオハガン島在住の崎山克彦氏、カオハガンキルト・プロデューサーで同じくカオハガン島在住の吉川順子氏、カオハガン島出身で立命館アジア太平洋大学を卒業されたジュディス・タリー氏を講師としてお招きし、京都大学東南アジア研究所教授の清水展氏によるコーディネートのもと、「南の島のカオハガン島における持続可能な自立的発展のあゆみ」をテーマに、

それぞれの視点から今まで・そしてこれからのカオハガン島について語っていただきました。

まず崎山氏よりカオハガン島との出会いをお話いただき、そこで少しずつ浸透していったキルト制作について吉川氏が話され、エコツーリズムの観点から小方氏が、そしてフェアトレードについて清水氏が話されました。特別ゲストとして途中から参加されたジュディス・タリー氏は、幼少時のキルト制作の体験や日本での大学生活等について話されました。

戦争ではなくても、飢餓・貧困・人権抑圧・環境破壊などによって地球の平和は脅かされています。その中において、人が暮らしていくために最低限必要なものがある「豊かな」自給自足の生活をしてきたフィリピン・カオハガン島の人々に、生活スタイルや欲望の変化が生まれる中で、島の人々が自立した形

で生活レベルを上げ、医療や教育を整備しつつ外部との接触・交流をしていくための持続可能な自立的発展のあり方をどう考えたらいかを、島の所有者の関わり方と「カオハガンキルト」の制作や教育の充実を通して探りました。

本展覧会では、色鮮やかなキルトの魅力を堪能していただくとともに、今後、島の運営や政治までを島の人々が主体的にかかわっていくための展望を考える機会となったものと確信しています。

本展覧会関連企画として、「平和」に関すること（愛、家族、世界、自然、環境、エコロジーなど）をテーマに一般の皆様よりキルト作品を募集いたしました。お申込みいただいたキルト作品47点は、本展覧会期間中、1階ロビーにて展示しました。

## 講演会の感想より

- 崎山さんや順子さんのカオハガンのお話のあとで見るキルトはやはり違って見えました。キルトという文化を伝えながらも、一緒に学んでいるという順子さんの姿勢は素晴らしいと思います。エコツーリズムなど島との付き合い方や、今後の課題など、その現実を知るだけでなく、人に伝えたり、もっと知りたくなりました。何か関わっていきたいです。  
※順子さんの心のこもった解説、島民の方との関わりを深く

感じました。アートの作品展のような素晴らしい作品にふれてとても楽しかったです。

（東京都 自営業 30代 女性）

- 清水先生の司会はよかったです。又その他の方々もジュディさんもよかったです。カオハガンの現状、未来への考え方もよく分かった。崎山さん・順子さん何時までもお元気でいて下さい。  
（60代 男性）

## 見学者の感想より

- フィリピンのキルトはなんか月でできたんですか？キルトは糸か、布、生地を貼っているんですか？いつも朝から夜までしてるの？はさみを使って、犬とか蝶とかの形を作るの？キルトの布は何枚使うの？だって、全部なくなるんじゃないの？おはなしキルトだから絵本のページもキルトじゃない？  
（立命館小学校 女性）

- 私はキルトを見るのが好きなので、このような展示があって喜んで見にきました。カオハガン島の人たちのキルトはとっても自由な発想ですごく新鮮でした。島の人たちが島のことが大好きなのがとても伝わってきます。カオハガン島の空気の中でこれらのキルトが見れたらどんなにいいかと思いました。島の自立についてなども考えさせられました。カオハガンの笑顔がずっと続いてほしいなと思います。  
（京都市内 大学生 10代 女性）

- 偶然立看板を見て、興味を抱いたので、来ました。作品はどれもフィリピンを感じさせる独創的なもので、見ていて楽しめました。作品の型がふぞろいなものが多かったのも、普段よく目にしてるものと違い手作りの温さのようなものが感じられました。とてもよかったです。  
（本学 産業社会学部4回生 20代 男性）

- 数年前、崎山さんの『何もなくて豊かな島』という本を読み、人が住む島を買いとるという想像もつかない話に非常に驚いた。そして先日たまたま職場である高校の廊下で「カオハガンのキルト展」のポスターを見て、あの島だと思い出した。母がパッチワーク教室の講師をしているので、各地のキルト展やパッチワーク展にはよく一緒に行っている。今日はカオハガンのキルトということもあり、私自身もぜひ見たいと思った。すばらしい作品が多く感動した。

（滋賀県 教育関係者 40代 女性）

- 最近のキルト展で見る作品は技術的だなあと思っていたところ、本展でのびのびとした自由な作品を見て何かほっとしました。ストーリーキルトの台風の中の椰子の木も猫ちゃんたちもとても素敵でした。明るい色がとても印象的でした。  
（兵庫県 会社員 50代 女性）

- 内容がすごく良く感動しました。特にカオハガンのパッチワーク作品、色彩といい技法といい最高でした。いいものを見せていただきありがとうございます。  
（奈良県 自営業 60代 男性）

- おらかな作品に出会い感動しました。自分の作品作りにも生かせたらと思います。“元気をくれてありがとう”とお礼を言いたい気持ちです。  
（大阪府 60代 女性）

## 世界報道写真展2009 - WORLD PRESS PHOTO 2009 -

### ～大分：立命館アジア太平洋大学会場～ ＜展示会＞

会 期：2009年10月1日(木)～14日(水)

会 場：立命館アジア太平洋大学 (APU)  
本部棟2階コンベンションホール

参観者：1,949名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、立命館アジア太平洋大学、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、大分県、別府市、大分県教育委員会、別府市教育委員会、NHK大分放送局

協 賛：キャノン株式会社、キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社、別府商工会議所、社団法人別府青年会議所

協 力：大分交通株式会社、亀の井バス株式会社



衣笠会場での参観者の様子

### ＜公開記念講演会＞

講 師：石川文洋氏（報道カメラマン）

テーマ：「戦場で見た命(ぬち)どう宝」

日 時：2009年11月11日(水) 14：40～16：10

会 場：立命館大学衣笠キャンパス 明学館96号教室

聴講者：210名

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテストの入賞作品（約200点）で構成された写真展で、世界中100カ所以上を巡回する展覧会です。今年で52回目を迎えた同コンテストは、前年1年間に撮影された報道写真を対象に開かれる写真コンテストであり、今回の応募者数は124カ国から5,508人、作品数は9万6,268点の応募があり、共に過去最高数でした。

昨年アメリカから始まり、たちまち世界に広がった金融危機は、これまで経験したことがないような社会状況を引き起こしています。米国の写真家アンソニー・スアウ氏は、金融不安の震源地となった米住宅問題の写真で今年の大賞に選ばれました。今年他に、アメリカのオバマ大統領の選挙戦を取材したカーリー・シェル氏の作品や、ケニアの部族間の対立を撮影した千葉康由氏の作品、北京五輪陸上男子200メートル走で優勝したウサイン・ボルト選手を取り上げたマーク・ダッズウェル氏の作品が入賞しました。

特別展会場でDVD放映される今年のドキュメンタリー映像は、イスラエルのガザ空爆に関するものでした。写真展同様、多くの参観者の方々に足をとめて頂き、今実際に世界で起こっている問題を身近に感じ考えて頂けたと考えています。

今年の公開記念講演会は、報道カメラマンの石川文洋氏を講師にお招きし、衣笠キャンパスにて開催しました。命こそ宝である、というメッセージのもと、石川氏がこれまでに撮影された沖縄やベトナム戦争時などの写真をスライドで見ながら、自らの経験を語っていただきました。

一般ニュース、アート、スポーツ、現代社会の問題など10の部門で入賞した作品約200点で構成される「世界報道写真展」をきっかけに、参観の皆様には写真家が危険を冒しても伝えたいものが何であったのかを感じ、考える機会をご提供できたのではないかと考えております。

### ～滋賀：立命館大学 びわこ・くさつキャンパス会場～ ＜展示会＞

＜展示会＞

会 期：2009年10月17日(土)～11月1日(日)

会 場：立命館大学びわこ・くさつキャンパス (BKC)  
エポックホール

参観者：2,061名

### ～京都：立命館大学衣笠キャンパス会場～ ＜展示会＞

会 期：2009年11月3日(火)～29日(日)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム  
中野記念ホール

参観者：9,495名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム、朝日新聞社、世界報道写真財団

後 援：オランダ王国大使館、社団法人日本写真協会、社団法人日本写真家協会、滋賀県、草津市、大津市、滋賀県教育委員会、草津市教育委員会、大津市教育委員会、NHK大津放送局（びわこ・くさつキャンパス開催分）、びわ湖放送株式会社、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、NHK京都放送局（衣笠キャンパス開催分）

協 賛：キャノン株式会社、キャノンマーケティングジャパン株式会社、ティエヌティエクスプレス株式会社

## 【石川文洋氏講演会の感想】

- 「命どう宝」、生き残ったから今があり、可能性があるというお話に共感しました。私の祖父は太平洋戦争に出兵し、命からがら帰国しました。もし祖父が亡くなっていたら、私の母や私はこの世に存在していません。そのことを考えると祖父が帰国した喜びをかみしめるとともに、自分の命を、そして世界の人々の命を大切にしていかなければという思いで一杯になります。(本学学生)
- 貴重なお話しが聞けて良かったです。戦争というものの悲慘さ、残酷さ、後に残すものを改めて実感しました。常に傷つくのは民衆そして子供であって、戦後誕生した世代の子供たちでさえも傷ついている事実は衝撃でした。写真を見ることによって感じるもの、写真を通して向き合っている人々が訴えているものを心に刻みつけて、毎日日本が平和であることに感謝しながら、自分が何をできるのか考えながら生きていかなければならないと思いました。石川さんがおっしゃった「歴史/戦争の事実を知ることが大切」というお言葉がすごく身に沁みました。私たちが出来ることは何か？常に考えながら勉学に励もうと思います。(本学学生)
- 実際の現場に足を運び続けた石川さんから、講演を聴くことができ本当に良かった。枯葉剤の影響が今も続いていることは知らなかったし、沖縄にもクラスター弾がたくさん残っているのは知らなかった。今までジャーナリストの仕事の貢献度などあまり分からなかったが、今日の講演を聴いてジャーナリストの影響力の大きさが分かった。(本学学生)
- 戦争の被害を生々しい写真で見られてよかった。ただ聞くより「戦争の残酷性」が伝わってきた。私は韓国人で、まだ韓国は休戦中だ。今後どうなるか分からないが、韓国・北朝鮮そして世界で平和を守ってほしい。そして生きていることがありがたいと思った。恵まれた環境で育てたから、恵まれない人を助けるのは当然なのに、つい自分のことだけ思ってしまう。もっとこういう講演が増え続けたらもっと多くの人が命の大切さに気づくと思う。(本学学生)

## 【世界報道写真展参観者の感想】びわこ・くさつ 衣笠キャンパス会場

- 見る写真、全てにすごく心打たれました。途中本当に涙が出そうになりました。すごく複雑な思いにもなりました。これからのこのような展示会にもっともっと訪れようと思いましたし、やはりこの様な世界の今から目をそむけず、しっかり向き合い考えて行こうと思いました。一人一人の平和の思いがいつか一つになってほしいなと思いました。私も今を伝えられるような人間になりたいと思いました。(高校生 10代 女性)
- 世界各国で起きてる話題、問題が写真というマスメディアを通して様々に写しだされている。美しいだけが写真ではなく、事実を生死や全てを飲みこみ写し出されていて、フォトジャーナリストに尊敬を抱くとともに真しに自分の問題として受けとめられた。良い機会だった。(京都市 20代 男性)
- 現代日本に暮らしていると、とても想像出来ない出来事が世界には、平然と起こっていて、それを一つの歴史として写真に残すジャーナリズム精神に感動した！一つ一つの写真が絵画のようでもあり、リアルを超えたリアルを感じる内容が良かった！世界の平和を世界中の人々が一人一人考えて行動していく動機にもなれば良いと思う。(京都市 30代 男性)
- 世界のあちこちで起こった異常気象による災害や戦争、経済の急落の様子が生々しく映されて時には正視できない写真もあり、深く自分も世界にできることをしなければと考えさせられました。日常のことに埋没、世界の人々と共に現在を生きて共有している視点を持ちつづけ、問題意識を持ちたいと思いました。(大津市内 40代 女性)
- 普段では決して見ること、知ることのできない世界の实情に触れることができました。特に印象に残ったのはロシア軍とグルシア軍の争いの写真の中での人々の目でした。展示されていた他の写真にない“ギラついた目”と“精気のない目”は戦場の異質性そのものだと感じました。(本学学生 20代 男性)
- 実際に世界で起こっていることなのに、自分には全くその実感はない。現実のようで非現実な世界なのだと思う。しかし、報道はその両者をつなぎ、鮮明に私たちの記憶に呼びかけてくるものがあると感じる。科学の発展によって、写真の技術が上がっている時代だからこそ、今というものを未来に残していくことはとても大切だと思う。(本学学生 20代 男性)

## 【世界報道写真展参観者の感想】立命館アジア太平洋大学会場

- 高校生のときから毎年見に来ています。自分の目でたくさんのことを見たい！とは思っているものの、やはり限界があるのでこの報道写真展で同じ地球上に起こっている事を見て見えていないことがたくさんあるのだと思わされます。それでもこの機会に知ることによって、新たに興味がわいたり、もっと知らないといけなと実感します。自分に何ができるか分からないものの、同じ地球市民として、知らないというのは余りにも無責任だと思う。(本学学生 20代 女性)
- 写真の時代・映像の時代と呼ばれる20世紀から色々歴史的な事件を伝えるようになって、実際に悲惨な状況は何一つ変わっていないことを痛感しました。(別府市 30代 男性)
- 平和な日本でありつづけてもらいたいと心から思いました。世界には不幸な人や恵まれない人が多いのだということをご写真展をみて感じる事が出来ました。いつか不幸な人がいなくなるような世界になってほしいと願っています。(別府市 40代 男性)

## 『台湾人生』 上映会

### 〈上映〉

開催日：2009年12月9日(水)  
作品：台湾人生 2008年/日本/81分  
時間：①13時10分～ ②14時45分～  
場所：立命館大学衣笠キャンパス アカデメイア立命21  
国際平和ミュージアム1階 中野記念ホール

参観者：210名

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

企画協力：(株)如月社

### 〈対談〉

時間：16時20分～17時20分

対談：酒井充子氏（映画監督）

安齋育郎氏（立命館大学国際平和ミュージアム名誉館長）

参加者：42人



映画上映会場内の様子



対談の様子 左:酒井充子監督 右:安齋育郎名誉館長

2003年よりはじまりました映画上映会の企画ですが、2009年度後期映画上映会では、2008年に制作された酒井充子監督の初監督作品「台湾人生」を上映しました。

歴史をさかのぼりますと、台湾は1895年から1945年までの51年間、日本の統治下にありました。その時代、日本は台湾において、インフラの整備や近代化を目指し台湾内の教育制度の拡充を行い義務教育制度が施行され、1943年の統計によると就学率はアジアで日本に次ぐ高い水準に達していたそうです。台湾での学校教育が日本語で行われたために、この時代に教育を受けた世代の人々は、日本語を話すことができる「日本語世代」と呼ばれます。映画の中では、激動の歴史に翻弄されながらも、人生を力強く歩んできた5人の日本語世代の方々の現在に至るまでの人生をインタビューで振り返るものでした。これまであまり知らなかった台湾と日本の歴史の一部を知り、もっと台湾や日本の様々なことについて知りたい、調べてみたい、と感じる内容でした。

対談では、監督が台湾映画を制作するに至った経緯が紹介されました。台湾映画に触発され、実際に台湾を訪れ、日本語時代の老人との出会いが映画制作の原点となったということ。それから7年間におよぶ取材活動を続け、今回の映画作品にまとめたということです。監督ご自身の経験から、近現代史の勉強があまりなされてこなかったという日本での教育の問題に触れつつ、台湾での教育についても、あまり教えられない台湾での歴史事実について触れながら、教科書問題がどこの国にもあることを指摘されました。なごやかな

雰囲気の中で対談が行われ、会場では大学生、一般の方々から監督との質疑応答が活発になされました。

対談の最後に酒井監督から、高校生、大学生に観て欲しいと作った映画です。台湾から日本を見ている人がいます。日本人はちゃんと生きているのか、対極的に物事を考えて欲しい、とメッセージを頂きました。

対談終了後、会場出口では酒井監督に伝えたい思いを手紙にしたためて、封筒を手渡し声をかけている参観者の姿が印象的でした。

### 映画上映の感想に寄せられたたくさんの声の中からいくつか紹介します。

#### 【映画を見た感想】

◆私は実際台湾へ何度か行き、台北で、日本語でお年寄りの方から話かけられた経験があります。台北で一ヶ月生活していた時も何人もの方とお話をしました。その経験があったので、この映画を見て近い気持ちで色々考えることができました。台湾であった台湾人の人々は、すごく親日で、日本が統治していた事実があっても、日本人を歓迎してくれるので、この映画を見て統治時代のことを一部ですが知れて、日本と台湾のつながりについて再度感心をもつことができました。もっと勉強したい、知りたいと思うことができましたのでよかったです。（本学学生2年生）

◆私はこれまで3回台湾に行きました。2度目の訪台は短期留学だった。ですが、年配の方々が私達日本人

を見つけるとひんぱんに日本語で話しかけてくださり、とても親日であることに驚きました。台湾人の対日感情について、これまで台湾人に聞いてみたり、書物を読んだり、ホームページを探したりしてきましたが、正直ピンと来ませんでした。しかし、今回映画を見て台湾人の対日感情、その歴史、台湾とは何かが少しわかった気がします。私は台湾についてもっと知りたいし、日本人にもっと台湾のことを知ってもらいたいです。  
(本学学生2回生)

- ◆60年以上経った今もはっきり発音される日本語に統治時代の影響の大きさを感じました。ある世代が皆喋れて校歌も日本語。そこまでのものだったのかと思うとおそろしいです。“どうして私たちを日本教育にここまで与えておいて戦後私たちのことを助けてくれなかったの”この一言に台湾と日本の戦後の歴史がつまっている。もっと日本を、日本語を憎んで嫌っていいはずの人々が私たちに経験を語ってくれる。その姿に胸が痛みました。他国である日本の戦争に従事した人々への保障を行わない日本政府が信じられない。在日外国人被爆者や慰安婦含め、賠償が甘すぎて腹が立ちます。大陸からの台湾支配・弾圧についても、日本こそが手を差しのべるべきだったと思います。「日本にはかわいがってもらった。感謝している。ただ政府に納得できない。」台湾人の友人

に言われた「私たちのもつ歴史は悲しい。だけど日本や日本人は好きだ。過去にとらわれず仲よくしていきたい」という言葉とかかりました。日本はその考え方に感謝し応えるべきです。  
(本学学生3回生)

#### 【対談の感想より】

- ◆自分がこの「日本」という国の中で今まで生きてきて、何を学んできたかをふりかえり、これからの「日本」を考えるきっかけとなれた。  
(本学学生1回生)
- ◆自信も「直感」を信じているタイプなのでごく共感できる所がありました台湾ほど、植民地化されて混乱している国はなかなかないと思います。地域ではなく「国」になれる時が来ることを願います。  
(本学学生1回生)
- ◆偶然あったおじいさんから、この映画の製作までいたったのは本当にすごいことだと思いますし、この映画を作ってくださいと感謝しています。酒井監督が「何かを伝えないといけない」という想いから「この映画につなげよう!」という気持ちは大切だと感じました。自分も行動していかないといけないと考えました。「日本」「日本人であること」を振り返りたいと思えました。  
(本学学生2回生)

【立命館大学教職員組合との共同企画】

## 【ONE SHOT ONE KILL —兵士になるということ—】フィルム公開

開催日：2009年12月10日(木)  
作品：ONE SHOT ONE KILL —兵士になるということ—  
2009/日本/108分 監督：藤本幸久  
時間：①作品解説15:00～15:15 作品上映15:15～17:15  
②作品解説18:00～18:15 作品上映18:15～20:15  
場所：立命館大学衣笠キャンパス以学館2号ホール  
対象：立命館大学生・教職員  
作品解説：安齋育郎氏(国際平和ミュージアム名誉館長)

アメリカの戦争と若者をテーマに、2006～08年に200日間アメリカを旅して撮影を続けた300時間を超える取材テープをもとに、1年間の編集で3本の長編ドキュメンタリー『アメリカばんざい』、『ONE SHOT ONE KILL～兵士になるということ』、『アメリカ～戦争する国の人びと』が生まれた。『ONE SHOT ONE KILL～兵士になるということ』は、アメリカ海兵隊ブートキャンプの12週間に密着したドキュメンタリー。ベトナムからイラクまで、アメリカの若者たちの戦争体験は、ひとつの事実を物語っている。



公式ちらし

それは、「人は、人を殺せるようにはできていない」ということ。それゆえ多くの若者たちがPTSDで苦しむことになる。だが、戦争は今日も続いている。では、どのようにすれば、普通の若者が戦場で人を殺せるようになるのかを取材している。

今回、立命館大学教職員組合とミュージアムの共同企画を開催するにあたり、一般上映を前に、藤本幸久監督のご協力を得て、フィルム公開という形で大学内で企画をしました。これからも、平和に関する作品の上映に取り組んでいきます。

## 2009年長崎青少年ピースボランテアとの平和交流を行いました

2009年12月12日(土)～13日(日)に、長崎青少年ピースボランテアの12名(高校生11人・大学生1人)が関西・京都で同世代の生徒・学生と平和学習・交流を行いました。

4回目の実施となった今年は、京都府立山城高等学校2年生が20人、北嵯峨高等学校等から3名、立命館大学の学生・大学院生4名、引率教員、職員を合わせて、全体で45人の参加となりました。

京都府内の高校生を募るべく、11月に平和学習のためにミュージアム見学に来館した京都府立山城高等学校2年生を担当する飯島先生にご相談をすることで、大勢の参加を得て実施できることとなりました。きっかけは、国際平和ミュージアムの見学と館長の平和講義について、当方に連絡が入った際、限られた時間で平和講義となるので、内容を確定するにあたり、学校・学年での取り組みや実際に生徒たちの興味関心を先生に伺ったことでした。きっと飯島先生にお願いすれば、今回の長崎青少年ピースボランテアの高校生との交流に興味関心を持っている生徒の募集にご協力頂けるのではないかと考えたのです。結果、2年生のクラスでまとまって参加いただけることとなったのです。

### <プログラム>

#### 一日目

- ・高杉巴彦立命館大学国際平和ミュージアム館長挨拶
- ・ミュージアム見学  
学芸員の展示解説を聞いて、各自音声ガイド機を活用しながら見学

#### 二日目

- ・平和交流会  
長崎と京都の高校生・大学生、同世代の平和学習・交流
- ・平和講義  
講師：君島東彦立命館大学国際関係学部教授  
テーマ：私たちが平和をどう創っていいのか  
5つのキーワード  
①偽善者 ②平和と民主主義 ③しない平和主義、する平和主義 ④NGO ⑤オーケストラ

君島先生の講義では、キーワード⑤オーケストラに関わって、先生は次のように話されました。平和を創ることは、一人ではできない。音楽でいえば、オーケストラ。それぞれのパートをそれぞれが担う。パートだけの演奏ではつまらなく、全部のパートが合わさってまとまった時に、ひとつの音楽となる。それぞれのパートが責任を持ち、手抜きすることなく、その役割を果たす。これら全部がなされた時に、音楽として、曲としてオーケストラ全体がうまくいくのである。

平和を創ることも同様で、ひと世代だけでは無理がある。継続していくことが大事である。各自が担うパートのところで、どんなことが課題なのか、常に考え行動することが重要となってくる。

長崎からの参加者は、過去に原爆投下による被害を受けた長崎の地から、核兵器廃のない世界を目指し、主に核兵器廃絶を求める活動に取り組んでいる活動が紹介され、積極的に意見交換がなされました。今回の京都の研修では、被害者としての立場に加え、日本の加害行為にも目を向け、加

害者としての立場を理解すること。また現代平和学では、平和＝戦争が無い状態以上のものと定義されており、課題は核兵器廃絶に加え、戦争・紛争以外のさまざまな世界が直面している課題があることを知り学ぶこと。さらに、それぞれの立場から平和創造のための活動を展開することの重要性を学ぶ機会になったことと確信いたします。

京都から沢山の高校生が参加したことで、同世代の高校生が平和を願う気持ちとしては同じでも、受け止めに違いがあることを理解する機会となりました。「平和ってなに？私たちに何ができるの」ということに対し、同じ学校・クラスで学んでいても、感じていることや考えていることが随分と異なるということに気づいた生徒もいました。原爆の被害を受けた身近な事実から、それらを次世代へと継承し、核兵器廃絶の活動に取り組む長崎の高校生がいる一方で、戦後64年の経過の中で、「原爆投下」は、歴史事実の一つとして捉え、それぞれが様ざまに平和活動に取り組んでいる、取り組もうとしている、私にも何かできるのでは、今日をきっかけに取り組もうとする思いを語る生徒がいたことが印象的でした。「平和」を願う思いは一緒。実際に交流し、対話をするところから、それぞれが自ら気づき、次の一歩へと具体的な行動をすることがとても良い体験となります。

引き続き、継続して取り組んでいきたいと考えます。ぜひ、興味無関心のある多くの高校生・大学生に参加をしてほしいと思います。



平和交流会の様子



平和講義の様子

### 【感想文から一部抜粋】

- 1人1人が集まって、いろんな想いを話して合えば、分かりあえることは必ずあると思う！近いところから全国へ、そして世界へと想いをつなげていこう!!
- 私は別に関係ない、そんな気持ちは誰も持ってはいけません。日本の広島、長崎で起こった事実、それをもっと伝えていってほしいです。みんなで学習していくことで、「平和」へと繋げていきたいです。
- もっと知って、機会を作って、「平和」に近づきたいです。京都にいる私たちが出来る事、長崎にいる方々が自ら出来る事は限られてきます。今日のこのイベントは大勢が集まったから出来たものすごく内容がこく、刺激のあるものだったと思います。こんな風に輪を広げながら、多くの人に「平和」に触れてほしいし、私も近づいていきたいです。

## 常設展示見学者の感想

戦争のことがよくわかったと思いました。  
(京都府 男性 小学生)

戦争についてよく分かったし、知らないこともほとんど全部分かったし、とってもよかったです。私は、平和ミュージアムに来てから、もっと戦争について知りたくなったし、やっぱり戦争はこわいなとかやったらいけないことだなとか思いました。これから、世界がどんどん平和になって、幸せな国になったらいいなと思いました。  
(滋賀県 女性 小学生)

語りべさんがとことところにおられるので、わからない事があたらすぐきけたのでよかったです。模型などもあってわかりやすかったです。学校で来たけれど、家族でいってみたいなあと思いました。説明もわかりやすくして小学生の私でも分かりました。  
(滋賀県 女性 小学生)

私たちの知らないことがたくさんあってよかったけど、とっても勉強になった。  
(滋賀県 女性 小学生)

私たちのまだ知らない戦争ひがいなどみんながどれだけくるしんでいるのかがわかりました。戦争がなければいいしなく、平和を思う気持ちがあれば、きっと平和につながるのだと思います。これからも戦争、平和、せぜん、人々、そのたの人たちも「平和」という気持ちがもしあたらきっとみらいは平和になり、どうぶつたちももどってくるでしょう。一人一人の気持ち、こうどうなどで、みらいはかわるんだ!! と思う気持ちがもてました。  
(滋賀県 女性 小学生)

戦争はおそろしいものだなと再び感じました。もっと平和な世界になればいいのにと思った。  
(三重県 男性 小学生)

やっぱり、戦争はだれにも、よいえいきょうをもたらさないで絶対にあってはいけないと思います。戦争でうでや足をなくしてしまった人、または亡くなった人は本当にかわいそうどころじゃないくらい切ないです。すごく展示品を見ていてかなしくなりました。日本はもう、戦争はしないといっていますが、他の国ではまだ戦いがあるので、なくなればいいと心からおもっています。  
(岐阜県 女性 小学生)

平和って大切だと思いました。戦争は本当にしてはいけないことだと思いました。  
(東京都 女性 中学生)

私達は幸せ者なんだなあ～と思いました。いつもまわりに水や食べ物があふれているのが普通になってしまっていますが、それは本当は普通ではないこと、もっと感謝を色んな人にすべきことなど感じました。  
(京都府 女性 中学生)

戦争についての知識が乏しい僕らにとって、すごくためになる展示だったと思います。本当は戦争は怖いというか、全てを失うと思います。  
(大阪府 男性 高校生)

戦争のこととかがよく分かりました。戦争はもう2度と起こってほしくないと思いました。ひがいにあった人達のつらさがよく分かりました。  
(北海道 女性 高校生)

戦争は反対だが、世界から無くすことはできないと思った。今でも戦争はあるし、人は学べないのかと悲しくなった。  
(北海道 男性 高校生)

戦争は小学生の頃から学んでいて、非常に恐しいということはよく分かっています。中学校・高校と学んで行くにつれ、いろいろな視点から見るができるようになってきました。少しでも多くの人に戦争のことについてわかってもらえるようにほくも、何かできることがあればやっていきたいです。  
(滋賀県 男性 本学附属高校生)

戦争の必要性は無いにひとしく、私たちはもっと目の前の事にしんしん向きあうべきだと思った。  
(神奈川県 男性 専門高校生 20代)

見学にきてよかったです。僕は今の平和な日本しか見ていないのでなかなか感じる事ができないが、今日の見学でもっと自分自身みつめなおさないといけないと思いました。戦争と平和…言葉では簡単に表すことができるが、実際問題としてこれからは難しい問題だと思う。日本がしてきたことを伝えていくことは大切かもしれないが、それと同時になぜこのような出来事が起こったのかを伝える必要があると思う。「みて、かんじて、かんがえて、その一歩をふみだそう」その言葉の意味を少しですが感じることができました。  
(京都府 男性 専門高校生 20代)

全てが赤裸々に展示してあって、とてもよかったです。今まで知らなかった当時の人々の苦しみや気持ちがほんの少しですが、わかった気がします。少なからず、心が動かされました。  
(京都府 男性 専門高校生 20代)

私の人生は点ではなかったと気付かせて頂いた点が有難かったです。  
(京都府 男性 専門高校生 20代)

案内を丁寧にして頂き、とてもわかりやすかったです。日本は加害国であり被害国でもあることが、ここでのたくさんの展示をみさせて頂く中で再確認できました。戦争の悲惨さ、恐ろしさを私たちが伝えていかなければならないです。  
(京都府 女性 専門高校生 20代)

日本の十五年戦争から、第一次、第二次世界大戦、そして冷戦、現代の戦争、紛争と戦争について幅広く知ることができたことが何よりも大きな体験でした。自分が日本の戦争のことを一部しか知らず、国民生活への影響や、東南アジアの例えば慰安婦問題など、戦争の新たな問題について知ることができた。歴史認識というものを日本人は特に意識して学んでいないと思う。  
(京都府 男性 本学学生・産業社会学部 20代)

「戦争」だけでなく、様々な暴力をとりあけているのが良い。戦争がなければ平和というわけではないことに気づかされた。展示方法、くふうされていて、深く考えることができた。  
(京都府 女性 他大学生 20代)

学校行事ではじめて参加しました。戦争のむごさ二度と行わさないため、世界の平和を願うばかりです。  
(愛知県 女性 60代)

あらためて「平和」について考えることが出来てとてもよかったです。(自分の青春時代のベトナム戦争について、もう一度考える機会を与えてもらえて)  
(兵庫県 女性 60代)

1回では見学できないので、再訪したい。ビデオの大型画面にあった環境問題、地球温暖化、砂漠化、森林破壊、酸性雨なども戦争のもたらすところが多くあるとの結論に納得させられた。暴力によっては何事も解決できないこと、日本の平和憲法9条を世界憲章にして、人類も地球の一員として、緑の地球、生命の命はぐくむ星にしたい。人類の知性は可能と思われれます。日本の方向もここにあるといえます。  
(兵庫県 男性 自由業)

※原文をそのまま掲載しております。

2008年度は、以下の方々や博物館・団体から資料や図書などをご寄贈いただきました。  
お名前を記し、感謝の意を表します（敬称略・50音順）。

資料

赤塚 康雄  
安斎 育郎  
石田 晋三  
井上 勇  
請田 恭子  
大橋加津子  
岡田 英樹

兼本 邦興  
北村誠太郎  
國友 政治  
酒井 昌子  
佐々木佳代  
島崎 秀雄  
田中 淳一

小路 静枝  
辻 芙美子  
寺内 邦夫  
成田須美子  
西野 昭子  
服部 素  
濱岡 穆

早川久仁子  
藤井 葉子  
藤岡 惇  
帆足 正規  
松井 和央  
松村新次郎  
的場 政紘

三宅美保子  
元山富士男  
森 克子  
山田 和子  
山元 博  
吉澤 孝子

図書（個人）

青柳 敦子  
赤塚 康雄  
安斎 育郎  
飯田 勇  
池上日出夫  
池田 鍊二  
伊藤 昭  
岩間 優希

岡田 裕之  
岡野 健  
おざわゆき  
小田 敦巳  
桂 良太郎  
こちまさこ  
小山 昭子  
酒井 昌子

佐々木康之  
島崎 秀雄  
鈴木 常勝  
高木 敏子  
高島紀代子  
田辺 幸子  
辻 芙美子  
寺内 邦夫

中井 吉彦  
長澤 順治  
能登 宏之  
服部 素  
林 洋武  
布川 庸子  
藤井 葉子  
藤重 典子

松井 秀夫  
村尾 孝  
森 一久  
湯川 益生  
横井久美子  
世継 淳子

図書（団体）

Chinese People's Association For peace and Disarmament  
Documentation of Cambodia  
Edizioni Comune di Milano Amici Del Museo Del Risorgimennto  
WiSEC  
World Press Photo Foundation  
愛知県総務部法務文書課泉史編纂室  
愛知東邦大学地域研究所  
明石市教育委員会  
明石市立文化博物館  
朝日新聞社  
跡見学園女子大学花蹊記念資料館学芸員課程  
安城市教育委員会  
安城市歴史博物館  
アンネ・フランク・ハウス  
飯能市教育委員会  
飯能市郷土館  
泉大津市教育委員会, 泉大津市立織編館  
泉屋博古館  
板橋区教育委員会  
板橋区立郷土資料館  
一宮市尾西歴史民俗資料館  
市立市川歴史博物館  
宇治市歴史資料館  
往生院民具供養館  
大阪青山短期大学  
大阪国際平和センター（ピースおおさか）  
大阪樟蔭女子大学  
大阪市立大学大学史資料室  
大阪人権博物館（リパティおおさか）  
大阪歴史博物館

大田区立郷土博物館  
大谷大学博物館  
大府市歴史民俗資料館  
大山崎町歴史資料館  
沖縄県平和祈念資料館  
貝塚市教育委員会  
外務省  
香川県立ミュージアム  
華頂短期大学博物館学芸員課程  
亀岡市文化資料館  
関西学院大学人権教育研究室  
関西学院大学博物館開設準備室  
関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター  
関西大学博物館  
岸和田市教育委員会  
北大阪ミュージアム・ネットワーク実行委員会  
北九州市立自然史・歴史博物館  
九州産業大学美術館  
9条世界会議in 関西実行委員会  
京都工芸繊維大学美術工芸資料館  
京都市学校歴史博物館  
京都市考古資料館  
京都造形芸術大学  
京都造形芸術大学芸術館  
京都大学大学文書館  
京都府立堂本印象美術館  
京都府立山城郷土資料館  
金の星社  
釧路市立博物館  
熊本市立熊本博物館

熊本大学五高記念館  
軍縮市民の会・軍縮研究室  
経済産業省資源エネルギー庁放射性廃棄物等対策室  
原爆忌全国俳句大会事務局  
原爆被害者相談員の会  
原爆文学研究会  
皇學館大学佐川記念神道博物館  
航空科学振興財団歴史伝承委員会  
高知県立歴史民俗資料館  
高知市立自由民権記念館  
国際基督教大学社会科学研究所  
国立民族学博物館  
コダック株式会社エンターテインメントイメージング事業部  
駒澤大学禅文化歴史博物館  
駒澤大学禅文化歴史博物館大学史資料室  
埼玉県平和資料館  
財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構  
財団法人世界人権問題研究センター  
財団法人多摩市文化振興財団（パルテノン多摩）  
財団法人野間教育研究所  
堺市博物館  
堺市立文化館与謝野晶子文芸館  
桜ヶ丘ミュージアム  
播磨町郷土資料館  
滋賀県  
滋賀県立琵琶湖文化館  
実践女子学園香雪記念資料館  
社団法人日本戦災遺族会  
衆議院憲政記念館  
しょうけい館 戦傷病者史料館  
城南郷土史研究会  
昭和館  
真宗大谷派（東本願寺）  
新日本出版社  
吹田市立博物館  
杉並区立郷土博物館  
全国戦没学徒を追悼する会  
仙台市教育委員会・仙台市歴史民俗資料館  
仙台市博物館  
仙台市歴史民俗資料館  
全日本社会貢献団体機構  
園部文化博物館  
第6回国際平和博物館会議事務局  
台湾文化学院  
たつの市立龍野歴史文化資料館  
玉川大学教育博物館  
中小企業家同友会全国協議会  
土浦市立博物館  
帝塚山大学附属博物館  
帝塚山大学考古学研究所  
天理大学附属天理参考館  
東京家政学院生活文化博物館  
東京工芸大学芸術学部  
東京大空襲戦災資料センター

東京都江戸東京博物館  
同志社社史資料センター  
東北大学総合学術博物館  
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局  
豊島区立郷土資料館  
苫小牧市博物館  
豊橋市二川宿本陣資料館  
長崎平和研究所  
南山大学人類学博物館  
南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター  
南丹市日吉町郷土資料館  
南丹市立文化博物館  
新潟市歴史博物館  
西宮市立郷土資料館  
日本写真家協会  
日本博物館協会  
日本ユネスコ協会連盟  
「ニューカレドニアの日系人」展企画実行委員会  
野田市郷土博物館  
白鹿記念酒造博物館  
半田市立博物館  
ひめゆり平和祈念資料館  
兵庫県立芸術文化センター  
平塚市博物館  
広島大学平和構築連携融合事業事務局  
ヒロシマ青空の会  
広島県立美術館  
広島大学平和科学研究センター  
ヒロシマ・ナガサキを考える会  
広島平和記念資料館  
福岡市総合図書館  
不戦兵士・市民の会  
佛教大学アジア宗教文化情報研究所  
文化環境研究所  
文京ふるさと歴史館  
文建会文化資産総管理処籌備処  
北海道新聞社出版局  
北海道大学総合博物館  
町田市立自由民権資料館  
港区立港郷土資料館  
ミュンシャ財団  
明治大学学芸員養成課程  
明治大学博物館  
文部科学省生涯学習政策局  
焼津市歴史民族資料館  
八尾市立歴史民俗資料館  
横浜開港資料館  
四日市市立博物館  
栗東歴史民俗博物館  
立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所  
立命館百年史編纂室  
ロマン・ロラン研究所  
和歌山市立博物館  
蕨市立歴史民俗資料館

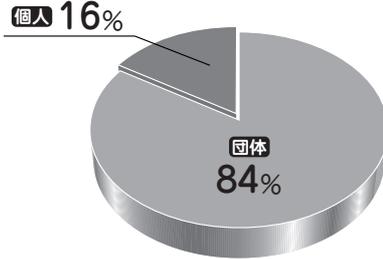
※ 以上、掲載の許可をいただいた方々につきまして、お名前を掲載いたしました。

2009年4月  
～2009年12月  
入館者状況

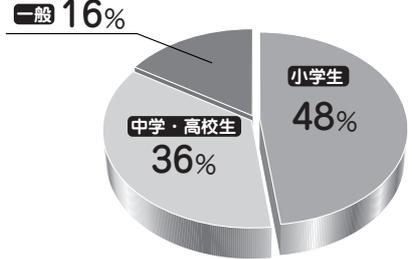
◎開館日数 221日

◎オープン後常設展入館者数累計 686,979名

<有料団体・個人入館者状況>



<有料団体入館者数状況>



2009年度	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	人数計(名)	
常設展	個人(有料)	338	492	417	689	1,178	425	780	571	586	5,476	
	団体(有料)	1,565	1,608	2,330	2,748	1,022	2,511	9,388	4,879	3,712	29,763	
	無料	1,125	994	587	846	847	259	296	1,132	747	6,833	
	特別展より	31	400	-	-	-	-	732	869	-	-	2,032
	小計	3,059	3,494	3,334	4,283	3,047	3,195	11,196	7,451	5,045	44,104	
特別展	春季特別展 『岡部伊都子回顧展』	(4/28～5/31)									3,954	
	秋季特別展 『世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—』											
	北海道(札幌三越会場)	(9/12～9/21)									4,615	
	大分(立命館アジア太平洋大学)	(10/1～10/14)									1,949	
	滋賀(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)	(10/17～11/1)									2,061	
京都(立命館大学衣笠キャンパス)	(11/3～11/29)									9,495		
秋季特別展 『フィリピン・カオハガンのキルト展 ～持続可能な経済的自立のあゆみ～』	(10/1～10/31)									11,199		
小計											33,273	
講演会	岡部伊都子回顧展(国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(5/16)										
	公開記念講演会 窪島誠一郎氏×池田良則氏×尾形明子氏『岡部伊都子を語る』										261	
	私たちに与った加藤周一 フォーラムin京都(朱雀キャンパスホール)	(6/20)									360	
	映画上映会「アメリカばんざい」(衣笠キャンパス 以学館2号ホール)	(7/4)									204	
	対談 藤本幸久監督×君島東彦教授											
	下見見学会	(6日間・7/29～7/31、8/20、8/21、8/27)									88	
	夏休み親子企画『「へいわ」ってなに?? 2009』	(8/1、8/2)									126	
	世界報道写真展2009—WORLD PRESS PHOTO 2009—											
	北海道記念講演会 守分寿男氏『いのちについて』、林直光氏『紛争地域の現場から』	(9/13)									50	
	衣笠公開記念講演会 石川文洋氏『戦場で見た“命(ぬち)どう宝”』	(11/11)									210	
	フィリピン・カオハガンのキルト展(国際平和ミュージアム 1階ロビー)	(10/10)									86	
	公開記念講演会 熊切圭介氏『南の島カオハガン島における持続可能な自立的発展のあゆみ』											
	パネルディスカッション 崎山克彦氏、吉川順子氏、小方昌勝氏、ジュディス・タリー氏、清水展氏											
	キルト展示作品解説 吉川順子氏											
	公開講座 第1回国際平和・人権連続セミナー(衣笠キャンパス 創思館カンファレンスルーム)	(11/25)									134	
ヴェラ・レンクスフェルト氏『ベルリンの壁崩壊と人生の転換 ～ある平和活動家の体験から～』												
映画上映会「台湾人生」(国際平和ミュージアム 中野記念ホール)	(12/9)									210		
対談 酒井充子監督×安斎育郎名誉館長												
フィルム公開「ワンショット・ワンキル」(衣笠キャンパス 以学館2号ホール)	(12/10)									35		
小計											1,764	

編集後記

メディアの発達には世界の各地で起こった出来事を瞬時に、かつ鮮烈にわれわれのもとに伝えてくれます。他人事と見過ごすことのできないハイチの大地震の惨劇、アフガニスタンの戦禍、華やかな冬季オリンピックの開幕などについての情報にわれわれは居ながらにして触れることができます。ある地域で人が命の危険に晒されたり、死の淵をさまよっているその瞬間にも、祝祭に沸いたり、新たな生命の誕生に喜んでる人がいます。この瞬間にも身を切られるような悲しみと喜びが地球上には数多生起しています。

地球上のあらゆる地域で、古来幾度となくそうした悲しみや喜びに見舞われ、翻弄されながらも、絶えることなく人間が今日まで生き抜いてきたということは感動的なことです。それを一過性の孤絶した惨禍や歓喜と見ずに、人間が相互に分り合える素地を作り上げるための痛ましくも壮大な営みのように考えるのは見当違いでしょうか。人間とは脆弱に見えながら、実のところ驚くほど逞しい存在なのではないでしょうか。今まさに、ペシミズムを乗り越えた人間賛歌が求められているような気がしてなりません。

本年度も、みな様のご支援により、世界報道写真展、秋季特別展などを無事終えることができました。来年度は学園創立110周年事業などの企画に向けた取り組みを進めていきます。引き続きご支援、ご鞭撻のほど、お願い申し上げます。

小関素明

# ミュージアムインフォメーション

## 2010年度特別展

### ●「カレル・チャペックの世界」

—文芸を通した平和と人間性の追求—

会期：2010年6月15日(火)～7月31日(土)

チェコを代表する作家カレル・チャペック(1890—1938)は、文明批評家、SF作家、園芸家、愛犬家などとしての多彩な活躍で知られています。今展では、チャペックの歩みを紹介するとともに、彼の遺品や、チャペックとともに活動し、イラストや装丁作家としても活躍した兄、ヨゼフ・チャペックによる装丁本、関連資料などをあわせて展示し、カレル・チャペックの世界を紹介します。

主催：立命館大学国際平和ミュージアム  
協力：株式会社村田製作所、北海道大学総合博物館、カトーレック株式会社、立命館大学理工学部ロボティクス学科  
後援：チェコ共和国文化省、駐日チェコ共和国大使館、日本チェコ協会、チャペック・スツルシュ寄贈基金、京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞社、毎日新聞社、読売新聞大阪本社  
企画協力：カレル・チャペック記念館(チェコ)、株式会社イデップ

### 関連企画

#### 7月3日(土) 公開記念講演会

演題：「ロボットと科学の技術は、どこに向かうのか？」

講師：川村 貞夫(立命館大学理工学部ロボティクス学科教授・日本ロボット学会副会長)

#### 7月22日(木) ムラタセイサク君<sup>®</sup>とムラタセイコちゃん<sup>®</sup>による出前授業

※詳細はHPをご覧ください

### ●「世界報道写真展2010」

—WORLD PRESS PHOTO 2010—

京都会場 会期：2010年9月22日(水)～10月16日(土)  
(立命館大学国際平和ミュージアム)

大分会場 会期：2010年10月19日(火)～11月4日(木)  
(立命館アジア太平洋大学)

滋賀会場 会期：2010年11月7日(日)～11月23日(火)  
(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品(約200点)で構成した写真展で、今年で53回目を迎えます。

いま、この地球上で起こっている世界の様々な側面を、写真を通して来場者の方に知っていただくことで、社会のあり方とは、平和とは何かについて、思いをめぐらせていただく機会となるべく開催するものです。

今年度も世界100カ所を巡回、展示に足を運ぶ人は全世界で数百万人になると予想されています。

### ●「ピース☆コレクション」

—資料でつづる平和ミュージアムの軌跡—

会期：2010年10月26日(火)～12月18日(土)

国際平和ミュージアムには、4万点近い收藏品がありますが、常設展示されているのは、ほんの数百点です。この展覧会では、普段は展示しきれない資料や、国際平和ミュージアムの活動について紹介します。

平和についての資料とはどんなものなのか、ミュージアムの舞台裏ではどんな仕事をしているのか、ぜひ見に来てください。



「カレル・チャペックの世界」ちらし



「世界報道写真大賞」  
ピエトロ・マストゥルツォ(イタリア/2009)  
大統領選後の6月24日、テヘランの建物の屋上からイランの現体制への抗議の言葉を叫ぶ女性



凱旋クレオン

# ミュージアムインフォメーション

## ミニ企画展

《開催決定・予定》

### ●フィリピン写真展 ～Be Philippine !!!～

企画：立命館学生団体 [BEPIN]

会期：2010年4月6日(火)～4月25日(日)

フィリピンの貧困の象徴でもあるスモーカーマウンテン（マニラ市北方のスラム街。ごみの投棄場が存在）。それを作り出した村の貧困と都市の開発の問題にスポットを当て、日本とフィリピンの関係についても紹介します。



スモーカーマウンテンでゴミを拾っている子供

### ●特別展 ピース☆コレクション プレ展示

会期：2010年7月27日(火)～8月29日(日)

### ●第4回立命館附属校平和教育実践展示

会期：2010年10月10日(日)～12月23日(木)

### ●第16回ミュージアムロード参加企画

会期：2011年2月13日(日)～3月31日(木)

主催：京都市内博物館施設連絡協議会・京都市教育委員会



ムラタセイサク君®とムラタセイコちゃん®

## 夏休み親子特別企画 2010

月日：2010年7月22日(木)

夏休みに親子で一緒に見て・感じて・考えて!平和について学びましょう!!  
京都が誇る最先端のモノづくりを支える人・技術について調べてみよう!  
ムラタセイサク君®、ムラタセイコちゃん®もやってくるよ!!

## 「下見見学会」

月日：2010年7月28日(水)～30日(金)、8月18日(水)～20日(金)  
夏休みに小学校・中学校の先生方を対象とした下見見学会(無料)を開催いたします。京都への修学旅行、遠足、校外学習、地域探検等様々な目的に合わせたミュージアムへの団体見学が可能です。見学会では、平和講義体験、ボランティアガイド解説つき見学、個別相談会を行います。



2009年小中学校教員対象下見見学会の様子

## 「平和ってなに色?」一字で表す平和のメッセージ

会期：2010年10月27日(水)～11月3日(水)

2005年文字・活字文化振興法の施行により、10月27日は「文字・活字文化の日」と制定されました。文字・活字文化についての関心と理解を深めていただくため、立命館大学白川静記念東洋文字文化研究所と連携して、文字・活字と、平和を楽しく学べる企画を行います。



2009年度前期映画上映会対談の様子

## 「映画上映会」

2003年から恒例となったこの企画は、「平和」をテーマとした映画上映と国際平和ミュージアムの館長等が映画の製作に関わった監督や関係者から、その思いを直接聴く機会を作るという対談を組み合わせました。前期・後期各1回の上映を予定しています。

第17巻第3号(通巻49号) 2010年3月10日発行



## 立命館大学 国際平和ミュージアムだより

編集・発行

立命館大学  
国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL. 075-465-8151 FAX. 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/index.html>